

**委員会だより**

<6月9日(日) 12名出席>

- 【1】財務報告：5月度決算報告(甲斐さん)  
⇒委員会了承  
・建設会計で、聖堂天井張替え、床ビニール張替え、集会室外壁塗装等¥1,936,000支出  
・下水道工事見積りを松下さんをお願いした。
- 【2】お知らせコーナー  
(1)山崎神父様の霊名祝日の件：・典礼委員が霊的花束準備中(7/7にお渡しする)。  
・婦人会より(例年の金一封に代え)祭服贈呈。  
(2)宮下神父様追悼ミサ、納骨式が、6/3山手教会にて挙行された。山崎神父様、委員長、前委員長、婦人会15名の皆さんが参列。  
(3)青少年対策を考える会：文書を6/9より配布。  
(4)第4回横浜教区福祉委員会セミナーが、6/15に開催される。3名分、申し込んである。  
(5)朗読者研修会が、7/7、8/4に藤沢教会にて開催される。積極的参加をお願いします。  
(6)第5地区宣教委員会(5/19)の報告(甲斐さん、丸田さん出席)：  
・「青少年問題」に関し、中和田教会から、「中和田教会の現況と当面の対策」を報告。  
・討議の纏めとして、「青少年の問題には、親自身の信仰への姿勢、日常生活への姿勢が大切である」が報告された。

【3】お話し合いコーナー

- (1)掃除機の件：催し物など土足開放時、現在の掃除機では容量不足との件で、調査の結果、物置に大きな掃除機があったが、不具合もあるので新たに購入する方向とした。
- (2)バザー委員の選出：  
壮年会からは、会長、橋さん、鈴木さん、婦人会からは、会長、冨田さん、山本さん、をそれぞれ選任した旨報告。
- (3)石井さんより、来年度の「聖歌の集い」の打合せが、7/7山手教会地下ホールで開催されるが、若手の参画が強く望まれている旨、報告あり。別途、選任。(⇒石井さん)
- (4)果田さんより、「聖歌隊で、先唱(詩編の部分)を歌いたい」旨提案あり。ミサの前に説明して、行なって行くこととした。
- (5)広報委員より、中和田会報に設けた「青少年コーナー」を長続きさせたいので、諸先輩より一言ずつ書いて頂きたい旨要請あり。

- (6)小野寺さんより、下記お話を頂いた。  
・宣教委員会で、青少年問題が取り上げられていること、会報に「青少年コーナー」が設けられること、非常に嬉しい。  
・中和田教会にも「聖書研究会」の場が欲しい。是非考えて欲しい。

**壮年会だより**

<6月16日(日) 11名出席>

- ▶委員会報告  
・7/7、8/4に朗読研修会が藤沢教会であります。  
・バザー委員の選出 橋さん、鈴木さん
- ▶青少年問題  
中和田会報の青少年コーナーに、青少年に伝えたいことを提言して欲しい。  
▶8月25日の卓球大会委員 宮崎、美底両氏  
▶7月21日に庭の手入れを行う。  
▶宣教委員の選出を9月頃までに決める。3回/年 藤沢教会で会合があります。  
▶一粒会よりの報告(小谷さん)  
▶今後の教会修理を考えていかねばならない。  
▶冠婚葬祭を教会で行う時のルールを決めたい。

**婦人会だより**

<6月16日(日) 29名出席>

- ▶委員会の報告  
▶6月2日、9日に古着の販売を致しました。売上金額は20,800円でした。残品はバザーでまた販売させていただきます。  
▶バザー用の未製作物をお願いしました。  
▶自主製作品と新品入れの箱を8月の始めより置きますので、皆様方の御協力を宜しくお願い致します。  
▶7月のバザー奉仕日 7月13日(水)、7月15日(月)です。  
次回例会 7月21日(日) お茶当番はB地区です。

.....  
\* 転入：エリザベト 赤岩 基恵 (茅ヶ崎教会より)  
戸塚区汲沢3-18-15 岩淵方 tel. (045) 862-9545  
.....

**ミサ当番表(96年7月、8月)**

月/日	主日	朗読、奉納	オルガン	月/日	主日	朗読、奉納	オルガン	備考
7/7	年間第十四主日	石井	大宮	8/4	年間第十八主日	橋	大宮	壮年会
7/14	年間第十五主日	青年会	岩淵	8/11	年間第十九主日	青年会	岩淵	青年会
7/21	年間第十六主日	婦人会B地区	石川	8/18	年間第二十主日	婦人会役員	石川	婦人会
7/28	年間第十七主日	井上	森田	8/25	年間二十一主日	山田	森田	壮年会

※当番の方は10分前には集合して下さい。

※ご都合の悪い方は典礼委員までお申し出下さい。(萩原：Tel 802-6258)

**今月の予定**

- 委員会 7月7日  
サロン 7月14、28日  
レジオ 6月12,19,26日



**第216回**

カトリック中和田教会  
広報委員会発行  
泉区 中田町 2701  
Tel. (045) 803-6141  
1996年 7月7日

**模索の冊(付)**

山崎 正俊



◎ 広島大学の西某という倫理学の師ありて、「シン」を以てその原則となす。その初発は儒の云う「礼」のことならんか。——こう云ったのは、国語の古文を教科として教えている、頭の毛の薄い、太ってダブダブのブヨブヨ、豚(ブタ)の漫画的顔と体形をまねていて、授業を勧めるよりは雑話を、特技とする先生であり、その期待は楽しいものであった。

いま思うに、ナガイキをしていてよかったなどの感に打たれている。あのような「シン」とは「マコト」の目をもって、事の真相を見極め、誠心誠意をぶっつけて、互いに信頼し合うことと説明され受け取られることらしいとは、短見にすぎるものではないかという反省があっても、相対する者のことをそのまま受け入れ尊び、その志を認めて行き過ぎに気遣いしながら、私自身もその邪心をそのまゝに消去することを怠らないように心掛けるということのようだ。

この頃、突然そのことに思い当らされたのだが、これには、有り難くも嬉しいことだと感謝している。いたずらに馬鹿をかさねていないことの証しではないか。いろいろとそのような新しい見解の根を示されていたので、それが見当はずれの方であると云われていても、とにかく、何らかの変化(進歩)のキザシには違いない。

齢のせいで頭が変調をきたしているはずだなどと、よく云われているようでも、面白い現象である。

◎ お世辞でもかまわぬ。これを私への応援歌だと思ふことにしたい。これは以前に読んだことのある物語だが、それとの連想から複雑な思い出となっている。——あるお婆さんが孫たちのために残しておこうと、若いときからの得意のタイプを打ち続けていた。息子や嫁たちも喜んで、その完成を待った。大変動の起こ

りづめの新天地での開拓の半生は、元気一杯のこのお婆さんにとっては、すばらしく充実した偉大な日々であった。けれどもタイプの記録は、各行の終りの活字が重ね打された大きな点になっており、その子や孫達には意味がとりきれないもので、お婆さんの願いは伝えにくいものになっていた。

何のことはない。眼も薄く耳も遠くなっているせいで、行の終わりを知らせる音が聞き取れず、打ちっぱなしにするより他はなかったというので、あまりにも身につまされる結果であった。これは笑い話としての投書ではあっても、善意だけにおわり、優れた経歴は伝えられないままに終わってしまうことになった出来事。残された家族にとっては、毎日、タイプに向かっていた老母の姿は一幅の聖画のように、その心に焼きつけられている——このような善意のつらなりの間に形をなしている記憶がいまの私たちの心の糧となり、新しい時代の進展に役立つことになっておると私は思う。同じまわり道を繰り返さないことによって、やむなく越えなければならなかった山坂のツラサは、前車のあととして、生きてくるものとなるのだ。楽しんで手にすると、その尊さがわからないままに、あちこちと回り道を経ねばならないことになるの苦難を重ねさせられる。

◎ そうです。あの先生の外見の奇天烈(きてれつ)さに引きつけられていただけのものが、半世紀をこえたいまでも、東洋思想として信じられている深さにうたれる切っ掛けになって、個性的な一瞬の輝きで包み、あの幼い日の「法悦」をよみがえらせる。そのあとの「キリストの教えと模範に触れた者」に、何かの「要(かなめ)となってくれることの善し悪しとは別に私の私らしさは、そのように方向つけられてゆく。

## まご 孫

福島 清

「ただいまー」、「ア、ジジダー」、「アー、ア、ー」可愛い声に迎えられると、一日の精神的な疲れがスーと消えてしまう。今、3才と1才の2人の孫と一緒に暮らしている。「甘やかしてはダメダヨー」、「ウン、ウン」といいながら、親の目が届かない所でつつい縮まりの無い顔をさらに崩して、「オーソウカ、ソウカ、ヨシ、ヨシ」と手を出してしまいます。

私のかすかな記憶の中に曾祖父、曾祖母の姿があり、また中学時代まで、祖父、祖母、両親、兄弟5人の9人家族であった。両親は子供5人を育てるために、働くことに精一杯であり、小さい子供の世話は自然に、祖父、祖母に任されていたのであろう。その中でも特に祖父、祖母に大変可愛がられていたように思う。いたずら好き、勉強嫌いな私は、親に言うとな怒られるような事でも、祖母には良く話していた。またいつも祖父のそばから離れず、木を切れば真似をしたり、野菜を作って近くの旅館に売りに出掛ければ、一緒に少し背負って行き、帰りにわずかな駄菓子を買ってもらうのが大変うれしかったものです。今でも、鋸が切れなくなるとヤスリで目立てをするのも、祖父に教えられた事の一つです。



今、二人の孫と一緒に暮らしていて、自分の子供を育てた時を振り返ってみると、いろいろな事に無我夢中であり、ゆとりをもって接していくことが大切と思いながら、とても出来なかったのだと思う。

ジジ、パパとなって、日々成長する孫を少しゆとりをもって見る事が出来る(責任が無いからかな?、経験のゆえかな?)ようになったのであるから、孫の教育などと難しい事は考えない事にして、共にジジ、パパも成長する気持ちで暮らして行きたいと考えている。しかし、長い人生の中で人格の形成に一番大切と言われている時期でもあり、どの様にしたら良いかと、まごまごしながらつつい可愛い過ぎてしまうものです。

以上

## 70年代アメリカの光と影 ~カーベントース~

石井 伸雄

カーベントースの音楽の魅力について、そしてカレンの歌の魅力について、これほどの確に表現した人は他にいないのではないだろうか。そしてまた、カレンをブライアン・ウィルソンに置き換えれば、この発言はそのままビーチ・ボーイズの音楽に対する的確な寸評になりうると思うが、それはともかく、カーベントースの魅力はカレンのヴォーカルにつける。カレンの無垢な美しさにあふれた歌声に潜んでいる強固な影。カーベントースの音楽に一度でも感動したことのある人はみな、その影に触れているはずである。



リチャード・カーベントース

カレン・カーベントース

カーベントースのヒット曲を聞いて過ごした高校時代には気づかなかったことだが、カーベントースの写真の大半はいささが奇妙である。写真の中でのリチャードとカレンは、ほとんど例外なく、真っ白な歯を見せ、幸福そうな笑みを浮かべている。それはまるで歯磨粉の広告写真のようであり、ロサンゼルスに至る所に植えられているパーム・ツリーのような不自然さが、そこにはある。写真のなかのカーベントース

は、米国の幸福のイメージという仮面を被り、笑顔を無理やり顔に張りつけているように見える。

事実、現実の世界におけるカーベントースは、決して幸福ではなかった。ここでも、ビーチ・ボーイズとカーベントースの間には奇妙な符合が見出せるのだが、ビーチ・ボーイズのウィルソン兄弟が父親マーリーの抑圧的な態度や体罰によって精神のバランスを崩していたように、カレンもまた、度を越して過保護で道徳的な母親アグネスの抑圧に苦しんでいた。加えて、彼女は、自分はリチャードに比べて音楽的才能がないというコンプレックスも抱えていた。そしてブライアンとテニスがドラックやアルコールに溺れたように、リチャードは睡眠薬を濫用し、また、カレンは神経性食欲不振という深刻な心の病を患っていた。

フロンティアの終結点であるカルフォルニアは、アメリカン・ドリームが成就する場所であると同時に消滅する場所である。換言するならば、栄光と絶望が交錯する場所だ。その意味では、ビーチ・ボーイズとカーベントースがそれぞれ60年代と70年代のアメリカの光と影を象徴する存在だったという事実は単なる偶然とは思えないが、ともあれ、ビーチ・ボーイズの音楽と同じく、カーベントースの音楽もイノセンスへの憧憬が結晶した一種の幻想であり現実の彼らはイノセンスな世界の住人ではなかった。そして自らが生み出した幻想によってカレンはアメリカの白人大衆が求める“明るく健全な良家の娘”“国民的味”という理想像を演じ続けざるを得なくなり、最後までそこから脱却できなかった。このことが、カレンを死に追いやっていたのである。

カレン・カーベントースとテニス・ウィルソンが相次いでこの世を去った83年は、カルフォルニアの美しい夢が消滅した年、と言っていいたい。

PS. やつぱりカレンの声の美しさ。すごく明るい声でメロディも明るいだけれども、どこかすごく切ないところがあったりして。同じ曲でもすごくハッピーな時に聞くとという風に聞こえるし、悩んでる時に聞くと涙が出てくるような。すごく身近に感じるんで、俺って泣き上戸だから(笑)。

## 青少年コーナー



### 君は教会に友達いる?

小山 康正

高齢化時代の到来ということが新聞、雑誌をはじめ様々なところで話題にのぼっています。私の手元にある資料は古いものなのですが、2025年の日本の全人口に占める就労可能な人の割合を、25%と予想しています。1人の働ける人が自分のほかに3人を養わなくては行けないこととなります。そのうえ、全体の人口も減少することが予想されています。中和田教会の信者数も同様な変化をしているようです。昨年、アンケートのために青少年と言われている人を信者名簿から拾い出しました。100名余が在籍していましたが、詳しく見てみますと、小中学生はそれぞれ10名にも満たず、高校生でも14名ほどでした。この世代が2025年には40-50歳代になります。その時にこの教会はどうなっているのでしょうか。

そのアンケートの中で最も印象的であり、問題として感じたことは、教会には友達がいらないあるいは来ないということでした。カトリック学生連盟で高校生の担当をしていたときになぜ教会に行くのかという話し合いを何度もしたことがあります。その時に一様に答えとして出てくるのは本当の友達がいるということでした。学校や習い事で付き合う友達とは違う友達が教会にいるということが信仰の大きな支えになっていると感じていたようです。私は中学生の時に洗礼を授かりました。その時、私自身も既に信者であった友人から受けた影響が大変に大きかったように思います。教会に行くとミサにあずかり、祈るということに意味を見いだせたのはそれからずっと後のことでした。また、そのときにも同じ宗教をもち、同じように考えられる友人がいたということが何よりも大事なことであったと思います。

教会に友達がいらないあるいは来ないということは人数も少なく、現在の社会的環境から見れば必然的結果かもしれません。日曜日も習い事や課外活動で忙しく、その中の友人関係を保っていかなければ生き残れない感じすら覚えてしまう。それでもやっと教会に来たのに誰もいない。そんな時に味わう寂しさは格別に堪えることではないでしょうか。なぜ教会に行かなくては行けないのか、行っても意味がないと思ったとしても不思議ではないでしょう。また教会に来て、同じ宗教を持つ、同じような年代の人と話す機会がないということは信仰を育む大きな助けを欠くことにはならないでしょうか。

これまでに若い人が教会を離れているということについて考えようということで、アンケートを行い、話し合いをしてきました。教会とそれを取り巻く環境を考えると、その現状も対策も容易なことではありません。友達に会うという至極簡単なことすら難しいのです。しかし、今なんとかしなければ高齢化時代といわれる将来に取り返しのつかないことになってしまうように思います。イエスは友は誰かという質問に、友になりなさいと答えています。今は教会の中でも友になってくれる人を求めているのです。